國學院大學学術情報リポジトリ

三代集の文末助詞カナ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富岡, 宏太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000920

三代集の文末助詞カナ

富岡　宏太

一　本稿の目的

中古和文資料、とくに散文資料においては、詠嘆の意味を持つとされる文末助詞が多数存在する。それらのうち、カナは、韻文にも多用される助詞である。

(1)白雲のこなたかなたに立ち別れ心を幣とくだく旅哉
〈古今集、巻八、三七九番歌〉

(2)惜しめども春の限りの今日の又夕暮れにさへなりにける哉
〈後撰集、巻三、一四一番歌〉

和歌集において、カナがどのくらい使用されているかについては、すでに神津眞佐子（一九八九）によって指摘されている。しかし、具体的な使用実態については、十分に検討されてきたとはいいがたい。

そこで本稿では、三代集（古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集）のカナを調査し、①文体の異なる資料におけるカナとの違い、②その違いの生じる理由、の二点を明らかにすることを目的とする。

二　調査対象と調査範囲

調査対象は三代集の歌に見られるカナである。古今集の仮名序と、詞書の例は除外した。表記は私意による。なお、調査対象の中には「哉」と表記された例も多く見られるが、(3)のように、ヤと訓むと、字足らずになる歌、(4)の

ように、第二句・第五句に現れ、かつ、「モアル哉」のように母音が含まれるため、字余りが許容される歌のいずれかである。例を示す。

(3)数ならぬ身は山の端にあらねども多くの月を過ぐしつる哉　〈後撰集、巻一三、九六六番歌〉

(4)憂き世には行隠れなでかき曇りふるは思ひのほかにもある哉　〈拾遺集、巻八、五〇四番歌〉

(3)をヤと訓むには、字足らずになる理由が説明されなければならない。(4)についても、「もあるかな」のかな書き例は見られるが、「もあるや」とかな書きされた例は見られないため、「哉」をカナと訓むことに問題はないと考える。

三代集のほか、中古和文の散文資料と対照する目的で、落窪物語、枕草子、源氏物語の三作品についても取り上げた。こちらは、和歌の例を除外した。

三代集の総用例数を［表一］に挙げる。

［表一］三代集におけるカナの総用例数

古今集	後撰集	拾遺集	合計
65	136	153	354

三　調査結果

三・一　上接語の違いから見た韻文のカナと散文のカナとの違い

まず、散文と韻文とにおけるカナの違いを、上接語の観点から見ていく。カナで終止する文を、体言にカナが下接した「体言カナ」と、活用語に下接した「活用語カナ」とに分ける。すると、散文では、どの作品でも、「体言カナ」と「活用語カナ」の例数が拮抗していることがわかる。「体言カナ」の例を挙げる。

(5)「いといみじきことかな。……」　〈落窪物語、巻二、一八三・一一〉

(6)「いといとほしきわざかな。……」　〈枕草子、一八一段、三一九・三〉

(7)「いとはしたなきわざかな。……」　〈源氏物語、松風、三六六・九〉

落窪物語では、カナの総用例数七四例中三三例（四五％）、枕草子では、四一例中一六例（三九％）、源氏物語では、

五八一例中二八〇例（四八％）を占める。

次に、「活用語カナ」について述べる。散文の「活用語カナ」は、多くの場合、動詞句が上接する「動詞（句）＋カナ」である。形容詞・形容動詞といった形容語も、補助動詞を介在して「形容語＋モ＋補助動詞＋カナ」となる（岡崎正継・大久保一男 一九九一、近藤要司 一九九七）。これも、上接語の観点から見ると、「動詞（句）＋カナ」に分類される。例を挙げる。

(8)「……、うれしくも思ひたまへけるかな」
〈落窪物語、巻一、八八・一三〉

(9)「うれしくもまた降り積みつるかな」
〈枕草子、八三段、一五八・六〉

(10)「……。いでや、いとかひなくもはべるかな。……」
〈源氏物語、柏木、一二四九・一〇〉

これとは対照的に、カナが形容語を直上に承ける例は僅少である。

(11)「……、物あはれなるかな。……」
〈源氏物語、東屋、一八四八・一四〉

(12)「心地のいみじう悩ましきかな。……」
〈源氏物語、夕霧、一三二七・六〉

以上をまとめたものが［表二］である。

［表二］散文におけるカナの上接語

	体言	活用語			合計
		動詞	補助動詞	形容語	
落窪物語	33	31	10		74
枕草子	16	21	3	1	41
源氏物語	280	153	136	12	581
合計	329	205	149	13	696

では、三代集においてはどのような傾向が見られるのだろうか。「体言カナ」について先に検討していく。古今集では六五例中一〇例（一五％）、後撰集では一三六例中二八例（二一％）、拾遺集においても、一五三例中四六例（三〇％）となっている。三代集における「体言カナ」の出現率は、散文の場合よりも低いのである。

(13)淡雪のたまればかてにくだけつつわが物思ひのしげきころかな
〈古今集、巻一一、五五〇番歌〉

⑭人知れず思ふ心は大島のなるとはなしに嘆く頃哉
〈後撰集、巻九、五九三番歌〉

⑮わりなしやしひても頼む心哉つらしとかつは思ふものから
〈拾遺集、巻一五、九四三番歌〉

一方、「活用語カナ」は非常に多く見られる。中でも特に多いのは、「動詞（句）＋カナ」である。古今集で六五例中五三例（八二％）、後撰集では一三六中一〇三例（七六％）、拾遺集では一五三例中九六例（六三％）と、高頻度で現れる。

⑯郭公鳴くや五月のあやめぐさあやめも知らぬ恋もする哉
〈古今集、巻一一、四六九番歌〉

⑰玉かづら葛木山のもみぢ葉は面影にのみ見えわたる哉
〈後撰集、巻七、三九一番歌〉

⑱住吉の松ならねども久しくも君と寝ぬ夜のなりにける哉
〈拾遺集、巻一二、七四〇番歌〉

次に、「形容語＋カナ」である。これらは非常に少なく、古今集では六五例中二例（三％）、後撰集においては、一三六例中五例（四％）、拾遺集においては、一五三例中一一例（七％）しか見られない。

⑲待つ人にあらぬものから初雁のけさ鳴く声のめづらしき哉
〈古今集、巻四、二〇六番歌〉

⑳女郎花にほへる秋の武蔵野は常よりも猶むつましき哉
〈後撰集、巻六、三三七番歌〉

㉑来で過ぐす秋はなけれど初雁の聞くたびごとにめづらしき哉
〈拾遺集、巻三、一六八番歌〉

「形容語＋カナ」より、「動詞（句）＋カナ」が多い点は、和文と同様である。

以上の結果を［表三］にまとめる。

［表三］韻文におけるカナの上接語

	体言	活用語			合計
		動詞	補助動詞	形容語	
古今集	10	45	8	2	65
後撰集	28	97	6	5	136
拾遺集	46	89	7	11	153
合計	84	231	21	18	354

三代集においては、いずれも「体言カナ」の例が少なく、

「活用語カナ」の例が倍以上見られる。「体言カナ」と「活用語カナ」とが、ともに相当数現れる散文との間には、大きな差異があると言えよう。

この、散文のカナと韻文のカナとの違いは、和文のカナと漢文訓読のカナとの間に見られる差異とも異なる。漢文訓読資料においては、「体言カナ」が見られず、「活用語カナ」のほぼすべてが「形容語+カナ」であるという特徴が見られる（築島裕 一九六三、大坪併治 一九八一ほか）。これに対して、三代集における「活用語カナ」は、「動詞（句）+カナ」が大勢を占めるからである。

以上のように、中古の韻文におけるカナを上接語の観点から見ると、和文の散文のカナとも、漢文訓読のカナとも、大きく異なるということが確認された。

三・二　評価の修飾の有無について

三・一では、三代集におけるカナの、他の文体の資料との差異を中心に見てきた。しかしながら、和文資料の散文のカナと、三代集のカナとの間には共通点も見られる。「動詞（句）+カナ」が多用されるという点である。では、「動詞（句）+カナ」の内実は、両資料間で同質なのであろうか。ここでは、本動詞（句）がカナに上接して構成された「動詞（句）カナ」に注目する。

また、近藤要司（一九九七）は、源氏物語の和歌における「体言カナ」を調査し、情意や評価の形容語が連体修飾しているものは少数であること、多くは、動詞が連体修飾の中心になっていることの二点を指摘している。

さらに以上の特徴が見られる理由について、

カナの用例にみるかぎり、和歌には、情意や評価を「あはれ、かなし」などと表現して一般化してしまうことを避けて、その分直面した事態を個別的具体的にとらえて言語化する傾向があるのである。（二九四頁）

としている。この近藤の指摘は、源氏物語の「体言カナ」という限定された範囲の調査をもとになされたものである。しかし、その根拠が和歌の特質に求められる以上、①三代集に範囲を拡げても、②「動詞（句）カナ」を調査対象に含めたとしても、情意や評価の形容語が現れにくい可能性は十分にある。そこで、三代集の「体言カナ」と「動詞（句）カナ」とを詳しく見ていく。

三・二・一「体言カナ」における評価の修飾

三・二・一・一　散文の場合

まず、「体言カナ」である。ここでは、次のような例を取り上げる。

【情意・評価の形容語句連体形＋体言＋カナ】

(22)「……。不便なるわざかな」

〈源氏物語、夕顔、一二〇・一〉

【情意評価の形容語句連用形＋［動詞句＋体言］＋カナ】

(23)「らうたげにものたまはせなす姫君かな。……」

〈源氏物語、夕霧、一三六一・一三〉

(22)は、情意・評価の形容語、もしくはそれに助動詞や補助動詞が下接したものが連体形となって、直接、体言にかかわる例である。一方の(23)は、「「姫君」とおっしゃったこと」について、「らうたげなり」と評価しており、情意・評価の形容語句は、体言にまでかかわるものと考えられる。このような例がどのくらい見られるのか、散文資料の状況を［表四］に示す。

［表四］散文の「体言カナ」と評価の修飾

	「体言カナ」	評価の修飾	割合（%）
落窪物語	33	28	85
枕草子	16	12	75
源氏物語	280	213	76
合計	329	253	77

例を挙げる。

(24)「いといとほしきわざかな。……」

〈枕草子、一八一段、三一九・三〉

(25)「さも清らにおはしける大臣かな。……」

〈源氏物語、宿木、一七六八・一一〉

(26)《あやしく、様々にもの思ふべかりける身かな》

〈源氏物語、薄雲、六〇六・七〉

(24)、(25)は、(22)と同じか、それに準ずるタイプの例であり、(26)は(23)と同じタイプの例である。落窪物語、枕草子は、母数が少なく、傍証程度であるが、ともに八割近くにのぼり、例数の多い源氏物語でも同様である。このように、

「体言カナ」には、情意・評価の形容語によって体言が直接修飾される例が非常に多い。

三・二・一・二　韻文の場合

では、一方の三代集ではどうであろうか。散文の場合と同様にして、「体言カナ」を見ていこう。例数と、百分率に直した数値とを、［表五］に示す。

［表五］韻文の「体言カナ」と評価の修飾

	「体言カナ」	評価の修飾	割合（%）
古今集	10	2	20
後撰集	28	9	32
拾遺集	46	9	20
合計	84	20	24

例を挙げる。

(27)老いぬればさらぬ別れもありといへばいよいよ見まくほしき君かな　〈古今集、巻一七、九〇〇番歌〉

(28)ともにこそ花をも見めと待つ人の来ぬものゆゑに惜しき春かな　〈後撰集、巻三、一三八番歌〉

(29)我ながらさももどかしき心哉思はぬ人は何か恋しき　〈拾遺集、巻一二、七五九番歌〉

(30)をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな　〈古今集、巻一、二九番歌〉

(31)いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる浪哉　〈後撰集、巻一九、一三五二番歌〉

(32)いにしへをさらにかけじと思へどもあやしく目にも満つ涙哉　〈拾遺集、巻一五、九九一番歌〉

(27)～(29)は、情意・評価の形容語が直接、体言にかかわる例である。一方、(30)～(32)では、形容語句が構文的には直後の動詞句に、意味的には体言まで含めた句全体とかかわる例である。(30)は、「呼ぶ」と「呼子鳥」とが掛詞になっている点で(31)、(32)とは異なるが、それに準ずるものとして扱うことが可能である。

三代集の「体言カナ」には、二、三割程度しか、情意・評価の形容語句による修飾の例は見られず、その点で散文とは大きく異なることが証明された。

三・二・二・二　「動詞（句）カナ」における評価の修飾

三・二・二・一　散文の場合

では、本動詞がカナに上接した「動詞（句）カナ」ではどうであろうか。

三代集のカナを見ていく前に、散文資料における「動詞（句）カナ」について確認する。情意・評価の形容語が主節述語と密接にかかわる「動詞（句）カナ」の構文は、次のようなものに限定されると考えられる。

【形容語連用形＋本動詞（句）＋カナ（評価の修飾）】

(33)「あやしく心走りのするかな。……」

〈源氏物語、浮舟、一九二五・四〉

厳密には、これ以外の構文をとっていても、情意・評価の形容語が、意味的に主節末の動詞（句）に関与することはありうる。しかし、動詞（句）で示された事態への評価を表すのは、(33)のような場合のみであろう。したがって、その他の例は対象から除外した。すると、次のような例が見られる。

(34)《……。あやしうも集まりたるかな》

〈落窪物語、巻三、二三三・八〉

(35)「さてもねたく見つけられにけるかな。……」

〈枕草子、二六〇段、四〇一・六〉

(36)「……。あやしうも、あまりやつしけるかな。……」

〈源氏物語、夕顔、一五二・七〉

(34)は「あやし」、(35)は「ねたし」、(36)では、「あやし」という形容詞が動詞句にかかわっている。

以上のような例は、「動詞（句）カナ」全体の中で、どの程度の割合を占めるのであろうか。作品ごとの「動詞（句）カナ」の例数、情意・評価の形容語による修飾の例数を示し、その割合を百分率で示したものが、［表六］である。

［表六］散文の「動詞（句）カナ」と評価の修飾

	「動詞（句）カナ」	評価の修飾	割合
落窪物語	31	6	19
枕草子	21	6	29
源氏物語	153	25	16
合計	205	37	18

すべての作品で、おおよそ二、三割程度、情意評価の形容語による修飾をうけた例が見られる。全体では二〇五例中三七例（一八％）である。これは、「体言カナ」の場合と比較すると明らかに少ない値である。では、三代集の場合はどのような結果が出るのであろうか。

三・二・二・二　韻文の場合

では次に、三代集の「動詞（句）カナ」の状況を見ていくことにする。

(37)押し照るや難波の御津に焼く塩のからくも我は老いにけるかな　〈古今集、巻一七、八九四番歌〉

(38)抜き留めぬ髪の筋もてあやしくもへにける年の数も知るかな　〈後撰集、巻一七・一二〇九番歌〉

(39)家づとにあまたの花も折るべきにねたくも鷹を据ゑてける哉　〈拾遺集、巻一七、一一〇一番歌〉

(37)は、「からし」、(38)は、「あやし」、(39)は、「ねたし」という形容詞が、動詞句にかかわる例である。このような例は確かに見られるが、出現率は、散文の場合よりもさらに少ない。三代集の「動詞（句）カナ」の状況を［表七］に示す。

［表七］韻文の「動詞（句）カナ」と評価の修飾

	「動詞（句）カナ」	評価の形容語による修飾	割合
古今和歌集	45	1	2
後撰和歌集	97	6	6
拾遺和歌集	89	8	9
合計	231	15	6

［表七］に示したように、「動詞（句）カナ」においても、情意・評価の形容語による修飾の例は、散文の場合よりも少ないことが明らかとなった。

したがって、近藤（一九九七）の指摘は、三代集の「体言カナ」、さらには「動詞（句）カナ」にも当てはまる、韻文の特徴であることが明らかとなった。

四　和歌に情意・評価の形容語が現れにくい理由

四・一「情意の一般化」は忌避されているか

ここまで、三代集のカナについて調査し、次の二点が明らかとなった。

a．カナの上接語という観点から見ると、「体言カナ」「形容語＋カナ」の例が極めて少なく、「動詞（句）＋カナ」の例が極めて多いということ

b．散文とは異なり、情意・評価の形容語が現れる例が少ないということ

本節では、a、bのような傾向が見られる理由を考える。前掲の近藤論文では、

和歌には、情意や評価を「あはれ、かなし」などと表現して一般化してしまうことを避けて、その分直面した事態を個別的具体的にとらえて言語化する傾向があるのである。

としていた。確かに、「直面した事態を個別的具体的にとらえて言語化する傾向」は見られ、その点は本稿も同様の立場を採る。問題は、その前の箇所である。

近藤によれば、形容語を用いない理由は、情意や評価の、特定の語による一般化を避けるため、ということになる。たしかに、可能性の一つとしてはありうるが、他の可能性を検討する必要もあると思われる。次例を参照されたい。

(40)秋の野に乱れて咲ける花の色のちくさに物を思ふころ哉　〈古今集、巻一二、五八三番歌〉

(41)人知れず思ふ心は大島のなるとはなしに嘆くころ哉　〈後撰集、巻九、五九三番歌〉

(42)春は惜し郭公はた聞かまほし思ひわづらふ静心哉　〈拾遺集、巻一六、一〇六六番歌〉

(40)は恋の歌である。恋をして「物を思ふ」というのは、確かに、形容語による一般化とは質が異なる。しかし、「物を思ふ」という語句によって、様々な感情、たとえば哀愁、寂しさ、恨み、妬み、といった感情を一元化しているわけであるから、むしろ形容語による表現よりも情意の一般化は行われていると考えるべきである。(41)には、「なげく」という動詞が使用されている。古代語の「なげく」は、「長く息をはく」というような動作動詞ではあるが、

少なくとも、恋の歌で相手を思って「なげく」中に、「嘆き」の感情があると考えるのは自然であろう。したがってこれも、一般化された情意を表していると考えられる。(42)は、「思ひわづらふ」とある。情意を一つの語によって表現することが一般化であるなら、これも情意の一般化の例と言えるであろう。

このような例は、「動詞（句）カナ」にも見られる。

(43)石間ゆく水の白波立ち返りかくこそは見め飽かずもある哉　〈古今集、巻一四、六八二番歌〉

(44)しづはたに思乱れて秋の夜の明くるも知らず嘆きつる哉　〈後撰集、巻一三、九〇二番歌〉

(45)思はずはつれなき事もつらからじ頼めば人を怨みつる哉　〈拾遺集、巻一五、九七三番歌〉

(43)は、「飽かず」（満足できない）と一般化していることになる。(44)は(41)と同様である。(45)は、「うらみつるかな」という形で歌が止められている。この動詞「うらむ」は、対応する感情形容詞「うらめし」が想定でき、情意を言語表現によって一般化した例と考えることができる。

このように、形容語を用いない場合であっても、情意を語によって一般化した例は見られる。しかもそれは、三代集のいずれにも、である。そこで、特定の語による情意・評価の「一般化」以外の側面をも指摘する必要がある。

四・二　カナの特徴と、上代のカモとの関係

この問題については、通時的な事実をもとにした説明が有効であると考えられる。文末助詞カナは、上代の文末助詞カモの構文的特徴を引き継いで、中古から、カモにとって代わる形で使用されるようになったとされる（遠藤邦基一九五二）。このカモによる構文も、韻文のカナ同様、情意・評価の語句は極めて少ない。たとえば、万葉集の中には、詠嘆のカモが少なくとも三八二例あるが、形容語をカモが直接承ける例は、六例しか見られない。

(46)み吉野の玉松が枝は愛しきかも（波思吉香聞）君がみ言を持ちて通はく　〈巻二、一一三番歌〉

(47)かけまくもあやにかしこし言はまくもゆゆしきかも（斎忌志伎可物）…　〈巻三、四七五番歌〉

また、動詞（句）で情意・評価を「一般化」した例もある。

(48)……この川の 絶ゆることなくこの山の いや高知らすみなそそく 滝のみやこは 見れど飽かぬかも（不飽可問）　〈巻一、三六番歌〉

(49)ひさかたの天知らしぬる君故に日月も知らず恋ひわたるかも（恋渡鴨）　〈巻二、二〇〇番歌〉

このように、三代集におけるカナの特徴は、前代の韻文のカモの特徴を引き継いでいるものと考えられる。

五　本稿の結論

三代集を対象に、中古の韻文のカナについて調査し、次の点を明らかにした。

i　上接語の観点からみると、韻文のカナは、散文とも漢文訓読資料とも異なる傾向を示す。

ii　「動詞（句）カナ」の多さという点で、散文のカナと韻文のカナとの傾向は一致するが、情意・評価の形容語による修飾が行われているかという点からみると、両者には大きな違いがある。前者には、情意・評価の修飾の例が多いのに対して、後者には、そうした例がほとんど見られない。

iii　iiのような違いが見られる理由について、先行研究では、形容語による情意・評価の「一般化」を避けるためとしてきた。本稿では、これに加えて、三代集のカナの構文的特徴が、上代のカモの構文的特徴を引き継いでいるものであることも重要であると指摘した。

使用テキスト

三代集→新日本古典文学大系（岩波書店）
源氏物語→池田亀鑑『源氏物語大成校異篇』（中央公論社）
万葉集、落窪物語、枕草子→新編日本古典文学全集（小学館）

参考文献

遠藤邦基（一九五二）『訓点資料と訓点語の研究』中央図書出版
大坪併治（一九八一）『平安時代における訓点語の文法』風間書房
岡崎正継・大久保一男（一九九一）『古典文法別記』秀英出版
神津眞佐子（一九八九）「詠嘆表現の変遷（1）―八代集の歌

末表現から―」『大阪青山短大国文』五号
近藤要司（一九九七）「『源氏物語』の助詞カナについて」『金蘭短期大学研究誌』二八号
築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会